

エリザベス・キューブラー・ロス先生のこと

いささか日聞になります。気になっていて、やはり書いておきたいと思いました。それは、あの「キューブラー・ロス先生」のことです。

エリザベス・キューブラー・ロス先生 逝く

2004年8月24日、アメリカのグループホームで、78年の生涯を終えられました。1995年重い脳卒中を患い、身の回りのことがほとんどできなくなり、ヘルパーに介護されたご生涯でした。

先生は、ご存知のとおり『死の瞬間』(読売新聞社、1985年)で、著名なスイス生まれの精神科医で、死の受容について、どのような過程を経ていくのか、必ず看護教育のなかで学習されたことと思います。

少し前、2001年に取材を受けたドキュメンタリー番組がNHK教育TVで放送されました。ご覧になられた読者も多いと思います。

そこで、先生の生涯を紹介させていただくとともに「ケア」について、私見を述べてみたいと思います。

生涯

1926年、スイス・ジュネーブの裕福な家庭で、3つ子の3姉妹の長女として生誕しました。厳格な家庭で育ち、いつしか、父親に愛されていないという、コンプレックスを抱くようになります。それは、ある日、かわいがっていた黒ウサギを、家庭で食べるため肉屋へ持って行くように言われ連れて行きます。家族が食卓の上に乗ったウサギを食べている姿をみて、両親から愛されていないと思うようになったとのことです。その後、父親から勘当され、独学で医師となり、国際平和義勇軍としてポーランドへ着任し強制収容所をみることとなりました。

25歳でアメリカ人マニー・ロスと結婚。1男1女を授かりました。

ある日、スイスから父が重病で、エリザベスに会いたいと連絡を受け、父のチューブだらけの姿を目にします。父親は、「家に帰りたい」と病院に訴えましたが聞き入れてもらえず、彼女は病院の反対を押し切り家に連れて戻ります。「一杯のワインが飲みたい…」との父の希望を果たし、父親が逝くのを看取りました。

黒ウサギ、父を看取った経験などが、彼女の人生に大きな影響を及ぼし、その後の10,000人以上の死の床にある人に、力を与えることとなったようです。

最期のレッスン

彼女自身が「死とその過程の中にいる」ことを、周りの人が理解し得ないこと、またマスコミでさえ、「聖女」のように振る舞ってほしいと非難をしたようです。

そのことは、最後の著書『ライフレッスン』(角川書店、2001年)でも述べています。

番組では、「人の最期のレッスンはもっと自分を愛すること…。それは、愛を与えること、愛を受け入れること」と、結んでいました。

キューブラー・ロス先生は、自身のことを、愛を受け入れることに不器用な人間だったとして、自身に与えられたレッスンだ…と結んでいます。

日常の臨床で

死にゆく過程…第一段階：否認、第二段階：怒り、第三段階：取り引き、第四段階：抑うつ、第五段階：受容、とされています。この過程は、死にゆく人だけのものでしょうか。

筆者は、30年に渡り、さまざまな患者さんを日常診療で、また訪問診療で診てきました。この過程は、回復が望めないような疾患に見舞われたら、誰しも経験せざるを得ないことではないかと思います。

看護の場面で、この過程が理解され、行為にうつされていることを望みたいものです。

美味しく食べたい

よく、意識ある多くの患者さんは、最期の瞬間まで「好きな物を、たとえ一口でもいいから、口から味わって食べてみたい…」と、訴えられます。しかし、現実には厳しく、制限を受け、希望を満たされることもなく過ぎていきます。

読者の皆さんも、経験されたことがあると思いますが、口内炎ひとつできても美味しく食べることはできません。食べるには、①口腔内が清潔に、②唾液の分泌が十分で、③舌苔がないような状態が、④維持されないと、咀嚼はおろか、嚥下すらできなくなります。誤嚥性肺炎を予防するためと、静脈経腸栄養に切り替え、なかには絶飲食にすることも少なくないと聞いたことがあります。

口腔ケアを効果的に実施するには、歯科関係者、言語聴覚士、管理栄養士、薬剤師などともチームを組んで、少しでも希望をかなえてあげたいものです。口腔ケアチーム(KST：口腔ケア・サポート・チーム)をお考えになられたらいかがでしょう。

キューブラー・ロス先生のことを振り返っていたら、いつのまにかそんなことを考えていました。